

糖尿病サポートチームの活動を考える

—糖尿病看護実態調査から—

Discussion about activities of the Diabetic support team from diabetic care survey

東8階病棟 矢嶋美雪 高橋良恵 三井貞代

<要旨>

糖尿病患者の増加をふまえ糖尿病看護の実態と看護師の意識調査を実施した。結果糖尿病患者は日常的に存在し関わる機会が多い反面、看護師の学習の場への参加率は低く設問の回答率も低いことから効果的な支援は行われていないのではないかと考えられた。糖尿病サポートチームは糖尿病患者がどの病棟に入院しても一定レベルの看護支援が受けられるよう活動していく必要がある。

<key words>

糖尿病看護 サポートチーム レベル向上

I, はじめに

現在糖尿病患者は増加の一途をたどり全国で約500万人、A病院では各病棟に平均3人の糖尿病患者が入院している。それに伴い看護師の専門知識のレベル向上も必要とされている。そこで今年度、糖尿病療養指導士を中心に有志による糖尿病サポートチーム（以下サポートチーム）」を発足させた。

今まで患者対象の糖尿病教室や職員向けの看護セミナー等を実施したが、患者の生活背景や社会環境の変化に応じた療養支援ができているかは評価できていない。そこで今後サポートチームとして糖尿病患者がどの病棟に入院しても一定レベルの看護支援が受けられるよう看護師の糖尿病看護レベル向上のためにどのような支援をしていったらよいかを明らかにすることを目的とした。

II, 方法

対象：A病院全看護職員454名

期間：2005年10月15日～10月31日の2週間

倫理的配慮：自記式質問調査用紙を作成、対象者に調査の趣旨を説明し同意を得て無記名で実施回収した。

Ⅲ, 結果 (回収数349名 回収率76.9%)

問① あなたの看護師経験年数は?

対象者のうち約半数が経験年数4～5年目以下であった。

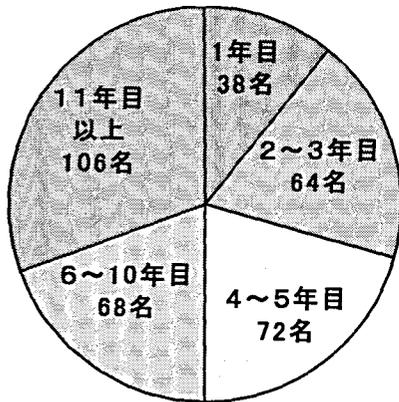


図1 経験年数

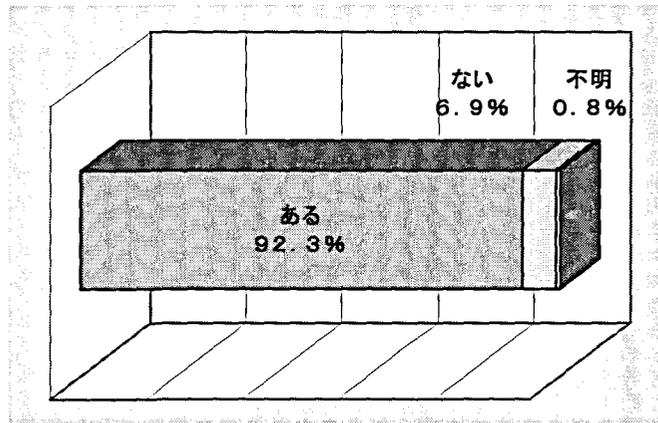


図2 DM患者と関わる機会

問③ 患者さんに対してインスリン療法の指導経験はありますか?

問④ 今までに糖尿病の学習会(院内外問わず)の参加したことはありますか?

対象者の6割以上がインスリン指導経験を持つが学習会への参加経験のある者は3割程度である

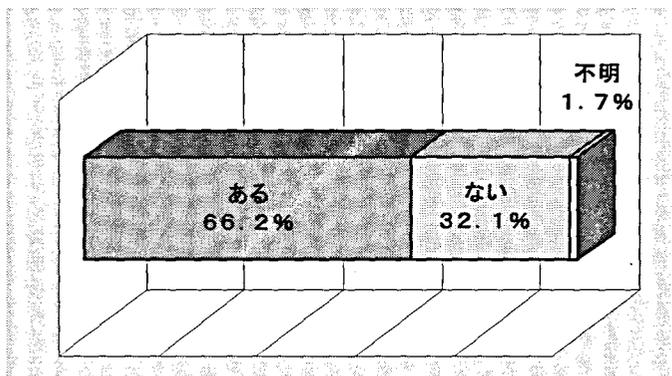


図3 インスリン療法指導経験

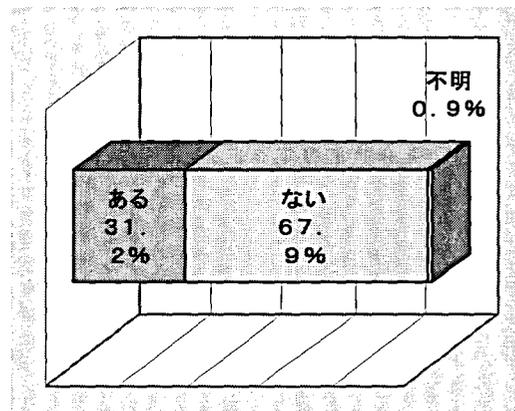


図2 学習会参加経験

問⑤ 糖尿病患者の療養支援で学んでみたいと思う内容を選んで下さい（複数回答可）

学びたい内容は食事療法、インスリン療法、病態の順に多かった。

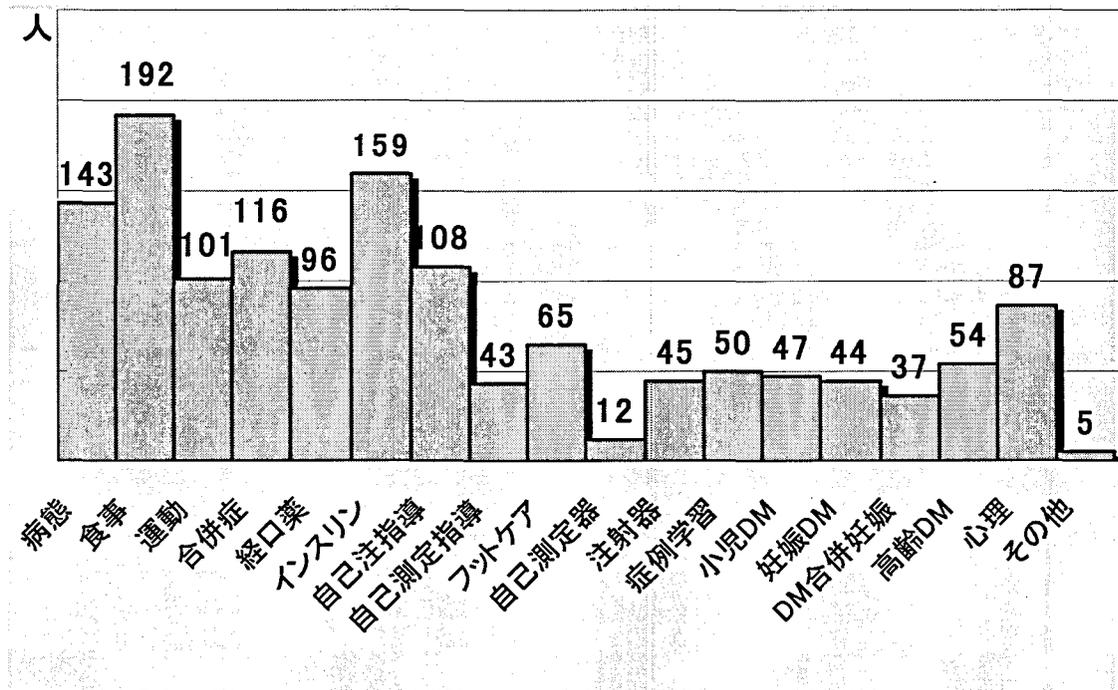


図5 学んでみたい内容

問⑥ 今までに糖尿病患者との関わりの中で困った事や悩んだ事があれば具体的に教えて下さい

問⑦ 今回インスリン療法についての学習会を計画しています。インスリン療法について、今までに経験した、困った事や知りたい事があれば具体的に教えて下さい。

問⑧インスリン療法について正しいと思うものに○をして下さい（○×）

インスリン療法についての項目で正解率が低い傾向がみられた。

表1

問1、今回、インスリン療法についての学習会を計画しています。インスリン療法について、正しいと思うものに○印をしてください。

【インスリンについて】

1. ペン型のインスリン注射液は使い始めたら室温保存でよい
2. 液が凍結していたが室温で完全に解凍してから使用した
3. ペン型注射器のキャップは、注射後は面倒でもつけておく
4. 注射の際よく振って使うのは、濁っているものだけである

【針の取り扱いについて】

1. 外出先で注射をするので予め針をつけておいた
2. 使用済み針は、容器に密閉すれば燃えるごみとして処理してもらってよい
3. 針には種類があり、ペン型注射器の種類ごとに対応するものが決まっている
4. ペン型注射器用の針は、太さは異なるが長さはすべて同じである

【低血糖について】

1. インスリン治療中の患者が「気分が悪い」と冷汗をかいていたので血糖値を測ったが、120 mg/dl あったので低血糖症状ではないと判断した
2. 低血糖の症状はひとそれぞれで、血糖が下がっていることに気付かない人もいる
3. 検査のため食止めの患者に誤ってインスリンを打ってしまったが、30分後には食事ができるのでそのままにした。
4. 低血糖への対処として、患者にブドウ糖を持ち歩くよう指導した

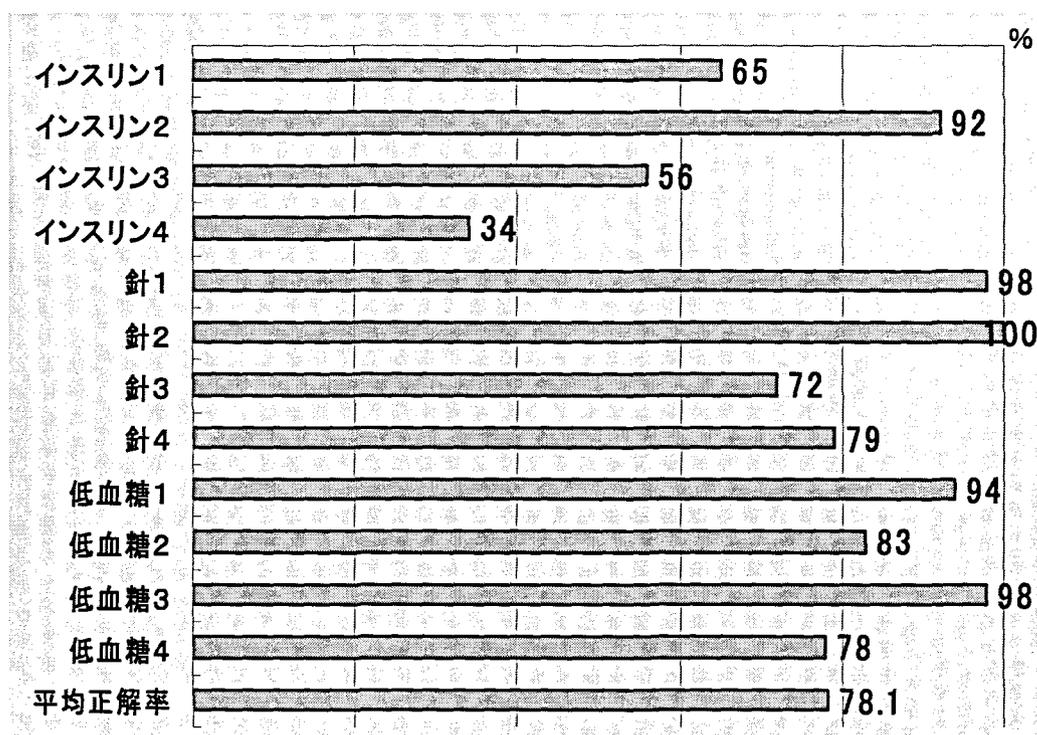


図6 インスリン療法設問正解率

IV、考察

糖尿病患者は日常的にどの病棟にも存在するため指導を含め関わる機会が多い。しかし看護師の学習の場への参加割合は低く、設問の正解率の低いことから効果的な支援が行われていないのではないかと考えられる。また学んでみたい項目にばらつきがあるのも経験年数が低く知識に自信がないまま支援しなければならない現状への不安の現れではないかと考える。このことは糖尿病患者であっても治療目的が糖尿病以外の場合十分な指導が受けられない事につながると考えられ、糖尿病サポートチームの今後の活動が示唆された。

V、結論

- 1、病棟看護師は知識、技術不足の中で不安を持ちながら糖尿病支援を行っている。
- 2、サポートチームはどの病棟に入院しても一定レベルの支援が受けられるよう
糖尿病看護の質向上のため活動していく必要がある。

VI、おわりに

糖尿病看護の現状を把握できる調査結果が得られサポートチームの活動の指針となった。今回の調査結果を参考に今後は糖尿病看護の学習の機会を提供すること、また運動療法や食事療法の視点から看護師だけでなく他職種との連携した活動も必要になると考えられる。